

## ネウボラ機能をもつ施設を継続的に利用する母親の思い ～妊娠期から子育て期に焦点を当てて～

久慈 彩佳<sup>1)</sup>・小林 恵子<sup>2)</sup>・八尾坂志保<sup>3)</sup>

Key words : ネウボラ, 母親, 子育て, 思い

**要旨** 本研究の目的は、ネウボラ機能を有する施設を継続的に利用する母親の利用前後での子育てに対する思いを明らかにすることである。研究対象者は、ネウボラ機能をもつ施設を妊娠期から子育て期まで継続的に利用する母親3人とした。半構成的面接による個別インタビューを実施し、「施設利用前の子育てに対する思い」、「施設利用後の子育てに対する思い」に分けて分析をした結果、149のコードを抽出し、25のサブカテゴリ、10のカテゴリを生成した。施設利用前の母親は、不安や孤独を感じていたが、施設を継続的に利用することで、心のゆとりや安心感を持つことができるようになっていた。このことから、本施設のような信頼できる居場所や支援者の存在が重要であり、顔の見える関係づくりと社会全体での子育て支援を展開する必要性が示唆された。

### I. 緒言

近年、核家族化や少子化傾向、都市化、女性の社会進出、情報の氾濫などにより、家族形態や家族のあり方が変化し、育児をとりまく環境は大きく変化している<sup>1)</sup>。このような環境の中で、特に妊産褥期にある母親は、内分泌系の変化が心身に多くの変化を生じさせる<sup>2)</sup>ことから、産前・産後うつ病や育児不安などの具体的問題の顕在化につながりやすい<sup>3)</sup>と考えられる。また、都市化や核家族化により地域や家族の子育て力が衰退している現代においては、妊娠期から母子を見守り支援する環境の再生が求められると考える。しかし、これまでの日本の母子保健システムは、妊娠・出産・育児期の支援体制が分断されており、切れ目ないサポートが存在しているとは言い切れない<sup>4)</sup>。

このような子育てをめぐる環境の変化と支援体制を背景として、近年我が国ではフィンランド発祥の「ネウボラ」が注目を集めている。ネウボラは、フィンランド語で「アドバイスする場所」を意味し、フィンランドにおける切れ目ない子育て支援の中核となってお

り、主にかかりつけ保健師が妊娠期から就学前の子どもと家族を支援するための地域拠点である<sup>5)</sup>。我が国においても、厚生労働省<sup>6)</sup>の「健やか親子21(第2次)」の基盤課題の1つに「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」を位置づけており、実際に「日本版ネウボラ」をめざした母子保健システムを構築する自治体も出てきている。しかし、我が国におけるネウボラの取り組みは開始されたばかりであり、ネウボラという言葉が独り歩きし、ワンストップ窓口づくりに止まる、ハイリスク層への限定という場合も多い<sup>7)</sup>。

ネウボラについての研究報告は、フィンランドの育児支援システムと看護職者の活動についての調査<sup>8)</sup>などがあるが、日本における研究は、ほとんど報告されていない。そこで、妊娠期から同一の専門職が介入し、切れ目ない支援を実践しているNPO施設(以下、「A施設」と述べる)の取り組みに着目し、施設を利用する母親の子育てに対する思いを明らかにしたいと考えた。

1) 新潟市地域包括支援センター姥ヶ山

2) 新潟大学大学院保健学研究科

3) 新潟大学男女共同参画推進室

平成29年10月13日受理

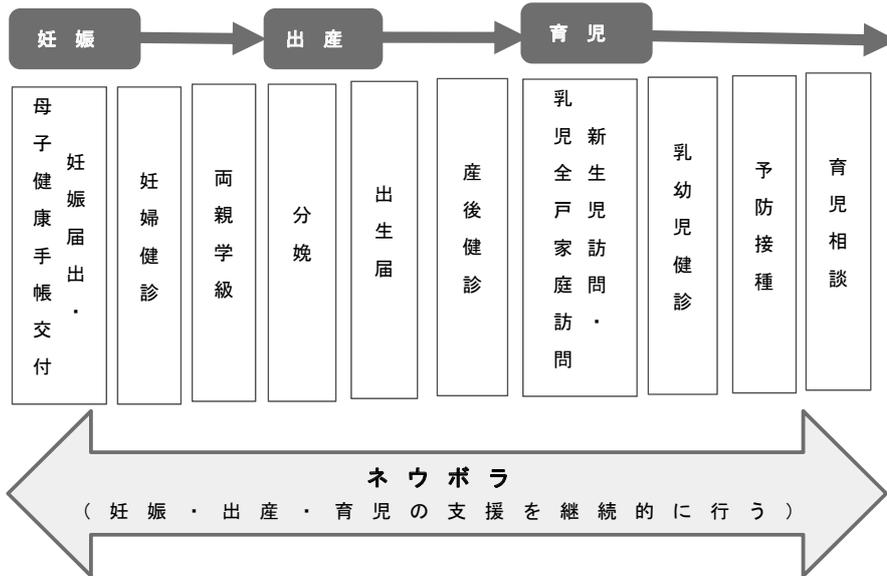


図1 ネウボラ事業概略図

## II. 研究目的

本研究では、ネウボラ機能を有するA施設を継続的に利用する母親の利用前後の思いを明らかにし、切れ目ない子育て支援への示唆を得ることを目的とした。

## III. 用語の定義

本研究では「ネウボラ機能を有する施設」を、「妊娠期から子育て期まで継続して同一の専門職チームが家族を含めて支援している施設」と操作的に定義する。

## IV. 研究方法

### 1. 研究対象

B市内のネウボラ機能をもつA施設を妊娠期から出産後まで継続的に利用している母親3人を対象とした。

A施設では、保健師・助産師・保育士等の専門職が身体的・精神的ケアを行っている。妊婦・産後の母親と子どもが自由に交流できる妊婦サロン・子育てサロンのほか、様々な学びの場を提供している。

### 2. 調査方法

平成28年8～9月に、プライバシーが確保できるA施設内の一室で、半構成的面接による個別インタビューを、1人1回、40分程度実施した。インタビューガイドを用い、「基本的属性」「A施設利用前後の子育てに対する思い」を語ってもらった。対象者の承諾を

得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

### 3. 分析方法

逐語録を質的帰納的に分析した。得られたデータから、施設利用前後の子育てに対する思いについて語られた内容を抽出し、文脈が反映するようコード化した。次に、類似した意味内容毎に分類し、サブカテゴリ、カテゴリを生成した。分析内容の妥当性を確保するため、母子保健および質的研究に精通した複数の公衆衛生看護学の研究者からスーパービジョンを受けた。

### 4. 倫理的配慮

A施設の施設長と研究対象者には、研究目的、方法、研究協力による利益・不利益、拒否の権利、プライバシーの保護、公表等について文書と口頭で説明し、同意書への署名により研究協力の同意を得た。なお、本研究は新潟大学医学部保健学科看護学専攻研究倫理審査委員会の承認（2016年7月6日）を得て実施した。

## V. 結果

### 1. 対象者の概要（表1）

対象者の年齢は30歳代が2人、40歳代が1人であり、子どもの人数は1～3人で、全員核家族であった。

### 2. 施設を継続的に利用する母親の思い

対象者の語りから149のコードを抽出し、25のサブカテゴリ、10のカテゴリを生成した。本論文ではカテ

ネウボラ機能をもつ施設を継続的に利用する母親の思い  
～妊娠期から子育て期に焦点を当てて～

表1 研究対象者の概要

ID	A	B	C
年代	30代	40代	30代
就労	無	有	有
子どもの人数 (年齢)	3人 (8歳・4歳・0歳)	2人 (6歳・4歳)	1人 (0歳)
家族構成	夫・本人・子ども	夫・本人・子ども	夫・本人・子ども
施設利用の きっかけ	引っ越したばかり で子どもを遊ばせる のに良い所がないか と探していた	第一子の子育てで 戸惑っていた時に、 ネットで存在を知り、 見てもらいたいと 思った	ネットで見ていて、 自宅の近くにあると 知り、子どもの役に 立つのであればと 思った
施設の 利用状況	第一子が3歳の頃 から利用、第二子、 第三子の産前時期 から月1回程度利用	第一子が2か月の頃 から利用、第二子の 産前時期から育休中 に頻回利用、仕事復帰 後は年に1回の利用	第一子の産前時期 から月3～4回の 利用

ゴリを【】、サブカテゴリを<>、コードを「」, 対象者の語りを斜体で示し、内容理解が困難と思われる箇所を（）で補足した。以下、カテゴリごとにサブカテゴリと代表的な語りを記述する。

1) 施設利用前の母親の思い (表2)

利用前の母親の思いについては、60のコードを抽出し、12のサブカテゴリ、5つのカテゴリを生成した。

(1)【妊娠や子育ての先が見えず、心の余裕が持てない不安や辛さ】

妊娠中の生活や子育てのイメージが湧かず、母親は<妊娠中の先が見えない不安や悩み>や、<先が見えない子育てで感じる知識不足や不安>を抱えていた。また子どもと母親だけの<一対一の子育てで心の余裕が持てない辛さ>や、<子どもを産み育てることへの重圧感>を感じていた。

ぎん泣きされたりすると、どうしたら良いか分からなくなる、誰もいない、2人きりだとなんで泣いているんだろうと思って…。(Cさん)

(2)【専門職に相談したかったという思いとその場限りの相談に対する諦め】

母親は、<専門職に相談したかったという思い>を持つ一方で、初対面の専門職による<その場限りの育児相談に対する諦め>の気持ちを抱いていた。

その場限りの保健師さんだったりするので、本当は言いたいことが別にあるんだけどかっこつけて当たり障りないところを相談して…。(Aさん)

(3)【子連れで安心して出かけられる場の希求】

母親は、<子連れの外出時に周囲の目を気にすることによる気疲れ>を感じ、<利用しやすい子どもの遊

び場を求める気持ち>を持っていた。

他の所でぎん泣きされちゃうとこっちが変な汗をかきちゃう、気を使うっていうか。(Cさん)

(4)【家族に頼れない孤独】

仕事を持つ夫に気を遣い、母親は<家族に頼れないという気持ち>や、<家族から認められず助けてもらえない寂しさ>を感じていた。

夫は仕事に行かなきゃいけないから(中略)そんなに言えない…。(Bさん)

(5)【限られた交友による孤立と、母親同士の交流の希求】

出産や子育てで友人と疎遠になり、母親は<限られた交友により子育ての話を共有できない不安や孤独>を抱え、<同じくらいの子どもの母親との交流を求める気持ち>を持っていた。

友達も出産・子育てで疎遠になるからお話しを聞ける人が数少なくて不安で…。(Cさん)

2) A施設利用後の母親の思い (表2)

A施設利用後の子育てに対する思いについては、89のコードを抽出し、13のサブカテゴリと5つのカテゴリを生成した。

(1)【先を見越した支援による心のゆとり】

妊娠期から施設に通うことで母親は、<妊娠期からの学びの場の利用による心の余裕>や、<先を見越したスタッフの関わりによる効果の実感と心のゆとり>を感じていた。

妊婦ケアコースとか妊婦サロン行った後は、「あ、私も妊婦だった」というのを思い出して、お腹の

表2 施設利用前後の子育てに対する思い

施設利用前の子育てに対する思い	サブカテゴリ	コードの例	コード数	
施設利用前の子育てに対する思い	カテゴリー	コードの例	コード数	
	妊娠中の先が見えない不安や悩み	妊娠中に産後の生活や子育てに対する準備が足りず、イメージが湧かなかつた	7	
	(1) 妊娠や子育ての先が見えず、心の余裕が持てない不安や辛さ	妊娠・出産に関する情報が少なく産まれた時の洋服の着せ方も分からなかつた 病院から自宅に帰り、一対一の子育てが辛いと感じていた 一対一で子どもを見なければならぬという気持ちがあった	12 8 4	
	(2) 専門職に相談したかったという思いとその場限りの相談に対する諦め	専門職に子どもの様子を見てもらいたかつた その場限りの育児相談では本当の悩みを吐露できず、当たり障りのないことを相談していた	2 4	
	(3) 子連れで安心して出かけられる場の希求	子育て支援センターは子どもを遊ばせることがメインであるため、気疲れをして足が遠のいた 近所の子育て支援センターは利用可能時間が短く、タイミングを逃すと行けずに孤独になった	4 3	
	(4) 家族に頼れない孤独	仕事を持った夫に気を使い、あまり相談できなかつた 両親を含め、家族が誰も育児を褒めてくれなかつた	5 3	
	(5) 限られた交友による孤立と、母親同士の交流の希求	近所に同世代の子どもが多いはずなのに出勤えず、孤独を感じた 同じくらいの子どもの母親と話す機会を探していた 妊婦ケアコースや妊婦サロンに行く、自分の身体に目が向き、妊婦ライフを楽しめるようになった 妊娠前からスタッフに相談し、さらしを巻く等の体調管理をすることによって育てやすさに違いがあらざると感じた	5 3 5 3	
	施設利用後の子育てに対する思い	(1) 先を見越した支援による心のゆとり	妊婦ケアコースや妊婦サロンに行く、自分の身体に目が向き、妊婦ライフを楽しめるようになった 妊娠前からスタッフに相談し、さらしを巻く等の体調管理をすることによって育てやすさに違いがあらざると感じた 肩の荷を下ろせるようなスタッフの関わりによる気持ちの落ち着き 母親が主役になれるスタッフの関わりによる心地よさ いつでもスタッフに頼れる安堵感 顔見知りのスタッフから継続してみてもらえる安心感 専門的な助言による信頼感と効果の実感	11 4 5 7 17
		(2) なじみの専門スタッフの継続的な関わりによる信頼や安心	顔見知りのスタッフから今の時期に合わせた専門的な助言をもらい、気持ちを汲んでもらえることで気持ちが楽になった 根拠のある助言に納得でき、実践すると効果が得られた	6 9
		(3) 子連れでの居場所ができた安心と前向きな思い	1人で通っても自分の気持ちをリフレッシュでき、上の子への接し方が優しくなった 顔見知りのスタッフや母親仲間がいて、ゆったりと第二の我が家のように過ごせた 夫が施設の保健師に教わった抱き方を実践してくれる等、子育てに関し気持ちを共有できるようになった	5 4
		(4) 家族との子育ての共有と気持ちの広がり	気持ちの余裕ができ、自分を育ててくれた実母の気持ちを考えられるようになった 同じくらいの子をもつ母親がいることで、皆同じで皆大変なのだと分かり、安心した	7 6
		(5) 仲間と子育てを共有する喜びと学び	自分より1か月早い出産予定の妊婦さんから躰せ方などを具体的に教えてもらい、刺激を受けた	6

ネウボラ機能をもつ施設を継続的に利用する母親の思い  
～妊娠期から子育て期に焦点を当てて～

子に語りかけたり…。(Aさん)

(2)【なじみの専門スタッフの継続的な関わりによる信頼や安心】

施設のスタッフと顔見知りになった母親は、＜肩の荷を下ろせるようなスタッフの関わりによる気持ちの落ち着き＞や、＜母親が主役になれるスタッフの関わりによる心地よさ＞を感じていた。また、＜いつでもスタッフに頼れる安堵感＞や、＜顔見知りのスタッフから継続してしてもらえる安心感＞、＜専門的な助言による信頼感と効果の実感＞があった。

自分の子どもの成長も(中略)、色々悩んでいたこととか、少しずつ改善されていく過程も(スタッフに)見てもらえるからすごい良い…。(Bさん)

(3)【子連れでの居場所ができた安心と前向きな思い】

施設を継続的に利用することで母親は、＜居場所ができたことによる子どもに対する前向きな思い＞や＜気兼ねなく子どもを連れて行ける安心＞を感じていた。

ゆったり過ごせるし、知ってるママも知ってるスタッフさんもいるしって感じで第2の我が家みたいな感じで使ってます。(Aさん)

(4)【家族との子育ての共有と気持ちの広がり】

母親は施設で得た知識を家族に話すことで、＜家族と共有できた子育て＞を実感していた。また自身の母親に思いを馳せるなど、＜心の余裕ができたことによる気持ちの広がり＞が生まれていた。

自分の母親に対してもこういう風に私のことを見ていてくれたのかな、とかそういう風に考えられるようになってきて…。(Bさん)

(5)【仲間と子育てを共有する喜びと学び】

施設で周囲の母親と接することで母親は、＜母親仲間と悩みを共有できる喜び＞や、＜周りの母子との関わりから得られる学び＞を感じていた。

(周囲の母親が)持ってきているお弁当を見て、「そうやって作れば良いんだな」って思って。本当に来ることが勉強になる。(Cさん)

## VI. 考察

### 1. 孤独な子育てから母親が主役の子育てへ

A施設利用前の母親は、妊娠期から出産・子育てのイメージが出来ないことによる不安や重圧を感じていた。また、坂本<sup>9)</sup>は、育児に専念する生活が社会との接点を失って、母と子の密室状況に置かれることにより、母親を育児不安へ追いやっていくと述べている。本研究においても、母親は子育て仲間が少ないことや

家族に頼れない孤独感を抱き、専門職とのその場限りの相談に諦めの思いを語っていた。このことからA施設利用前の母親は、一対一の子育て環境に置かれ、強い不安や孤独を感じていたのではないかと考えられる。しかし、A施設を継続的に利用することにより、母親の子育てに対する思いが変化したと考えられる。その理由として、主に以下の二つが挙げられる。

一つは、妊娠期から子育てに対する心身の準備ができたことである。生後4～11か月の子どもを持つ母親1,500名を対象とした調査<sup>10)</sup>によると、妊娠中から出産後の子育てのサポートについて準備をしていた人は、出産後に受けたサポートに対して高い満足度を得ていた。A施設では、妊娠期から身近な子育ての情報が見られる上、各期に合わせた専門知識を学ぶことができることから、母親は妊娠中から子育てに対するイメージを持って、それに対応するための心身の準備ができたと考える。

二つ目は、母親が一対一の子育て環境から解放されたことである。牧野<sup>11)</sup>の調査では、学習や地域活動などに出かける機会の多い人ほど、子育て不安が小さかった。本研究でも、母親はなじみの専門スタッフの継続的な関わりや、母親仲間との子育ての共有により、安心感や喜びを得ていた。野口ら<sup>12)</sup>は、子育て支援センター等に参加している母親が、子どもにいろいろな遊びや、他の子どもとの遊びを体験させること、母親自身も他の親と話すことを期待し、その効果を得ていると報告している。しかし、従来の子育て支援センター等では、必ずしも保健師等の専門スタッフが常駐しているとは限らない。ネウボラ機能をもつA施設では、母親が中心に置かれ、顔見知りの専門スタッフからの継続的なサポートを得たり、母親仲間と子育てを共有することにより、母親は子育ての重圧から解放され、不安が減少していったと考えられる。

### 2. 切れ目ない子育て支援への示唆

日本における子どもを産み育てるための支援システムの構築について古川ら<sup>13)</sup>は、人間が人間を産み育てるという重要な時期に女性が持つ力を最大限に発揮できるように、妊娠期から継続的に支援する体制が必要であると述べている。このことから、A施設のような妊娠期から信頼して利用できる場所や専門職の存在が重要となる。また母親主役の関わりをしながら、母親が子育てに肯定的なイメージを抱けるよう、妊娠期から顔の見える関係づくりを展開する必要があると考える。

さらに、中川<sup>14)</sup>は、子育ては社会全体で見守り支え

るという社会モデルで対応する方向が今後さらに強調されると述べている。本研究においても、子育て仲間やスタッフ、家族に支えられながら子育てをすることの有効性が示唆された。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究は、全国の自治体でネウボラに関する取組みが進められているにも関わらず、実態が把握できていない利用者の思いについて記述した報告としては意義がある。しかし、対象がネウボラ機能をもつ施設が1施設、かつ研究対象者が3人であることから、一般化するには限界がある。今後は、対象施設および対象者数を増やし、検討していく必要がある。

## Ⅶ. 結論

1. A施設利用前の母親は子育てに重圧や不安を感じていたが、専門性と顔見知りの親しみやすさを併せ持つA施設の継続的な利用を通じ、信頼感や安心感が得られ、継続的な心のゆとりを持つことができた。
2. 母親にとって妊娠期からの信頼できる居場所や支援者の存在が重要であり、顔の見える関係づくりが必要である。

## 謝辞

本研究に快くご協力を賜りました対象者の皆様、ならびに施設職員の皆様方に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 上野恵子, 穴田和子, 浅生慶子, 他. 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷. 西南女学院大学紀要. 2010;14:185-196.
- 2) 近藤潤子. 妊産婦をとりまくサポート・システムについて. 看護研究. 1986;19(1):118-128.
- 3) 橋本優花里. 妊産婦への心理的支援の現状について. 福山大学こころの健康相談室紀要. 2008;2:27-34.
- 4) 古川洋子. 日本における産み育て支援システムの構築. 人間看護学研究. 2008;6:71-76.
- 5) 特集妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援—日本版ネウボラを目指して. 地域保健. 2015;46(1):8-65.
- 6) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課. 「健やか親子21 (第2次)」について—検討会報告書(概要). 2014年11月11日更新: <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11908000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Boshihokenka/0000064817.pdf>
- 7) 山口有紗. 小児医療からみたヘルシータウン, ワンストップでつながる子育て支援—ネウボラを例に. あらかわヘルシータウン・クリエイティ部. 2016年1月11日;第6回後半レポート#7:<http://empubliic.jp/4860>
- 8) 鈴木香代子, 岡光基子, 廣瀬たい子, 他. フィンランドにおける子どもの虐待予防のための育児支援—看護職による活動を中心に—. 小児保健研究. 2015;74:3:447-452
- 9) 坂本裕子. 親と子どもの社会性獲得に向けた子育て支援の現状と課題—社会化をサポートする地域社会の子育て支援に関する一考察—. 『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会). 2003;5(4):43-50.
- 10) ベネッセ教育総合研究所. 出産後の母親へのサポートの実態と育児意識に与える影響について. 2015年3月調査: [http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/sanzensango.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/sanzensango.pdf)
- 11) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要. 1982;3:34-56.
- 12) 野口純子, 三浦浩美, 船越和代, 他. 子育て支援センターを利用している母親の育児ストレスと育児に対する自己効力感の検討. 香川県立保健医療大学雑誌. 2015;6:29-36
- 13) 4) 前掲書
- 14) 中川信子. 言葉と発達—いまどき子育てアドバイス第223回—支援の入り口としての健診(1). 地域保健. 2016;47(4):86-89.

ネウボラ機能をもつ施設を継続的に利用する母親の思い  
～妊娠期から子育て期に焦点を当てて～

Feelings towards child rearing in mothers that are  
continuously using a facility with Neuvola functions  
～Focus on pregnancy to child rearing～

Ayaka KUJI<sup>1)</sup>, Keiko KOBAYASHI<sup>2)</sup>, Shiho YAOSAKA<sup>3)</sup>

1) Niigata City Community comprehensive support center, Ubagayama

2) Graduate School of Health Sciences, Niigata University

3) Gender Equality Office, Niigata University

*Key words* : Neuvola, mothers, child rearing, feelings

**Abstract** Changes in feelings regarding child rearing in mothers that are continuously using an NPO facility with Neuvola functions were investigated, aiming to identify the effects of continuous child rearing support. Participants were mothers (N=3) that continuously used a NPO facilities with Neuvola functions from their gestation period until after childbirth. Semi-structured interviews were conducted individually and results were analyzed from the following perspectives: “feelings towards child rearing before using the facility” and “feelings towards child rearing after using the facility.” As a result, 158 codes were extracted and 18 categories including 43 sub-categories were developed. It was indicated that mothers felt anxiety and loneliness before using the facility. Through continuous use, they came to feel relaxed and safe. It is considered important for mothers to have a place they can rely on, such as this facility, as well as reliable supporters. The need to support child rearing by society as a whole and to build face-to-face relationships is suggested.

Accepted : 2017.10.13